２０２２年度　沖縄大学
学校推薦型選抜

「国際コミュニケーション学科小論文」
問題用紙

２０２１年１１月２０日（土）
１０：００～１１：００

2022 年度　学校推薦型選抜

次の文章に対するあなたの意見を自由に、600 字から 800 字で述べなさい。文章からの引用は文字数にかぞえる。

「2020 年オリンピック」開催を含め、日本の政界や芸能界などのあらゆる分野でのリーダー的存在である方々の言動を見ると、日本社会に多様性が根付くにはまだ時間がかかるだろうと思わざるを得ない。性差別、弱者差別などのさまざまな問題がそこにはある。

その中でも多文化共生、特に外国人との共生が日本社会には避けて通れない課題となっている。県内の居酒屋やコンビニなどで働く外国人の姿は決して珍しくはない。彼らの労働力が県民の生活基盤を支えていると言っても過言ではない。時には、日本人がやりたくない仕事まで彼らは不平不満も言わずにこなしている。

働いている外国人の中には、技能実習生、日本語学校や専門学校などで留学生として学んでいる人たち、そして就労ビザで在留資格をもらっている人が多い。現在は単純労働をしていても、一生懸命勉学にも励み、2，3 年後には専門や技術を身に付け、素晴らしい人材として成長していく人が多い。また彼らの多くは日本で働き、母国にいる家族を助けるために仕送りをしている。かつて中南米などに移住し、成功して沖縄に貢献してきた沖縄人と通じ合うところがそこにあるのかもしれない。

しかし、在日外国人と日本人との間には、互いに通じないところ、理解できないところ、差別や偏見などの陰の部分がある。今年の 3 月に名古屋市の入管施設に収容中だったスリランカ人女性の死亡事件が、日本の外国人受け入れ政策の問題点を表面化した。

われわれ市民レベルで考えるべき課題もある。コンビニ客の中に、「外国人レジは嫌」と言い、日本人の店員を求める人もいるようである。飲食店で働いている外国人社員が日本人も含め社員を指導したり、彼らの相談に乗ったりしているケースがある。それが 21 世紀の現状でもある。外国人という色眼鏡で見ると、実態が受け入れ難くなる。また、アルバイト先で外国人同士が母国語で話している時、「日本語以外を話すな」と注意されたことがあるという話も聞いた。「郷に入れば郷に従え」をそこまで求めていいのか、疑問に感じた。

外国人労働者の受け入れ拡大に向けて国家レベルの議論も足りないが、地域レベルで住民と外国人が気持ちよく暮らせるように取り組む必要がある。あまりにも交流がない状況の中では、摩擦が生じやすい。お互い認め合い、尊重し合う社会を創りたい。

（ディリープ・チャンドララール　「外国人との共生課題　互いに尊重し合う社会を」　沖縄タイムスの『論壇』より　2021.9.14）